あなたの初めは小さくあっても
あなたの終りは非常に大きくなるであろう。
（ヨブ記 8:7）

純福音東京教会・出版部
〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

あなたをプラスの人生へと導く

しなんげ

12
2017

Full Gospel Tokyo Church

CONTENTS

■ 2　賛美のいけにえ …… イ・ヨンフン牧師

■ 4　ヨンサンコラム …… チョウ・ヨンギ牧師

・すべてのことについて感謝しなさい

■ 6　メッセージ …… 志垣重政牧師

・聖霊の働き

■ 9　特集｜純然な感謝、溢れる喜び……イ・ヨンフン牧師

・感謝する人は幸いである

■ 16　主と歩く …… ヘンリー・グルーバー牧師

・勝利するまで落胆せずに祈り続けなさい

■ 21　統一時代を開く……ベン・トレイ牧師

・準備過程における進歩

■ 26　十字架の檀上 ……カン・サン牧師

・主イエスと私が一緒になれる時

■ 30　我が人生のプラス……

・冷蔵庫の奥に隠れていた感謝

・御言葉のために感謝します

■ 39　信仰の明文化を成し遂げますように㉑…… イ・ヨンフン牧師

・我が喜び、我が望みとなれる神様

■ 43　牧会の香り ……ジュ・ミョンガプ局長

・よりによってなぜナラティブ説教をするのか？

■ 47　これが知りたい……シン・ソンジョン牧師

・創世記 6 章 4 節に書かれた
「神の子たち」と「人の娘たち」は誰なのか？

■ 49　世の終わりの日まで……ソン・ヒョンギョン牧師

・ノアの時から人の子が来られるまで救いは同じだ

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 11 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。
ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

賛美のいけにえ

イ・ヨンフン牧師

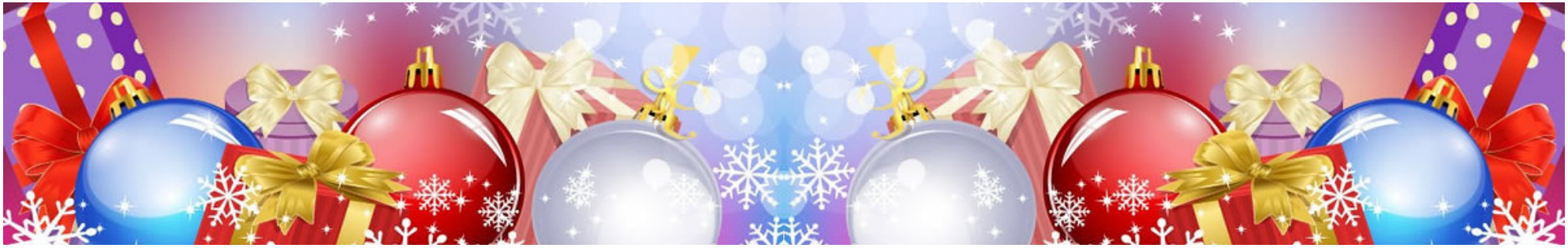
恵みとは、失ったものを取り戻すことです。現代人は、高貴なものを失って生きています。それは創造主に対する感謝の賛美です。救世軍を創設したウィリアム・ブースは「良い曲を悪魔の手に渡す必要がない」と述べました。「良い曲」とは恵みがあふれる中で歌う感謝の賛美です。「悪魔に渡す」という表現は、感謝の賛美を失ってしまい、恨み、不平不満を言うという意味でもあります。

ですので、いかに荒野のような状況にあったとしても恨みつぶやくなら、良い曲を悪魔に渡すようなかたちになります。私たちは、失われた感謝の賛美を回復しなければなりません。それが恵みです。真の感謝の賛美は、現実と環境を超越した中で捧げられるいけにえとなります。

韓国の人は嘆き悲しむ国民情緒があるからか、物事の動きに「泣く」という表現を多様に使っています。「この秋にコオロギがなく（鳴く）」とか、ススキもないて、カモメもなく（鳴く）といいます。さらには、障子紙（しわが寄る）も、拳もなく（腕が鳴る）といいます。また、歌に「私の心もカモメのように大声で泣く」と表現します。しかし泣くのではなく、創造の摂理によって歌うのです。「泣く」という言葉を、「歌う」という言葉に変える瞬間、心と世界が変わります。

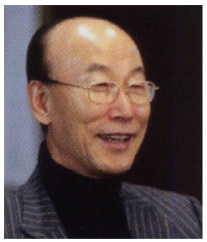
聖書は賛美について「いけにえ」として言及されています。「だから、わたしたちはイエスによって、さんびのいけにえ、すなわち、彼の御名をたたえるくちびるの実を、たえず神にささげようではないか。」（ヘブル 13:15）

いけにえは、選民としての確認と礼拝、畏敬の念と感謝、贖罪と祝福に対する特徴があります。賛美はその証拠です。交響曲のような虫の音が鳴り響くこの秋、私たちの胸にも賛美があふれるべきではないでしょうか？ †



ヨンサンコラム

すべてのことについて感謝しなさい



チョウ・ヨンギ 牧師

単一教会として世界最大規模であるヨイド純福音教会の元老牧師として仕えている。筆者は、美しい社会作りへの参加と、真の福祉社会のために、キリスト教精神を基にして設立された「ヨンサン・チョウ・ヨンギ慈善財団」の理事長として、第二の働きを繰り広げています。

私たちはどんなことに出会っても、すべてのことに感謝する習慣を身につけなければなりません。私たちは預言者ハバククのように、救いの神お一人によって喜び楽しむことができますか？キリストの十字架によって罪から救われ、永遠の命、天国を得られたことだけに感謝し喜ぶことができますか？

感謝できるときだけに感謝するのは、神の恵みを知らない人々もやっています。私たちクリスチャンは感謝する条件が全然揃わなくても、ただ主である神だけに喜び感謝しなければなりません。このように感謝を捧げる人々に、神の驚くべき奇跡が起こります。また感謝を感じるところで終わらず、表現する習慣を持たなければなりません。感謝は表現するその瞬間に、香りとなって家族と隣人を喜ばせます。

アフリカの聖者として有名なアルバート・シュバイツァー博士は、少年時代を振り返ってこのような文を書きました。

「今まで成長して来た自分の過去を振り返ってみると、凄く沢山の人々から助けられて来たことに気がつく。しかし私は、その人たちに感謝の気持ちを伝えることなく、今に至った。私が感謝の気持ちを伝える前に、彼らの多くはこの世を去ってしまった。それを思うと、私の心はさらに痛む。感謝は暫く躊躇したり、保留したりするものではない。その都度、気持ちを伝えることが大事だ。」

私たちが積極的に感謝を表し、感謝の香りを放つ時、神様も喜ばれ、栄光をお受けになります。マルコによる福音書 14 章には感謝の濃い香りを発して、イエス様を喜ばせた一人の女性の話が記されています。イエス様の恵みにあまりにも感謝し、自分の結婚準備のために溜めておいた貴い香油を、主イエスの恵みに感謝し、すべて捧げたのです。

このように感謝は自分の一番貴重なものを、すべて捧げられる心です。また、このような感謝の心を積極的に表していく時、美しい香りとなって、主に栄光を捧げることができます。イエス様は香油を捧げた女性に、「彼女は力を尽くして、わたしの体に香油を注いだ」と言われました。ですから感謝は、最上のもの、最高のもので、力と真心、すべてを尽くして捧げるものでなければなりません。神様は、このようにすべてのことを主に捧げる人の感謝を喜んで受け取ってくださり、祝福と奇跡を施してくださいます。ですから私たちは、力と真心を尽くして、真実な感謝を神の御前に捧げなければなりません。

暖かい日差しをたくさん浴びた稲ほど実が詰まり、いばらの中で咲く百合の花こそ、濃い香りを放つものです。預言者ハバククは、極度の悲しい状況からその悲しみを香しい感謝と賛美に昇華させました。†

聖霊の働き

―― ローマ人への手紙 8 章 14 ～ 16 節 ―

「全て神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である。あなた方は再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである。御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子である事をあかしして下さる。」

イエス様を受け入れた聖徒は、誰でも神の御旨を悟り、従順したいと願います。ローマ人への手紙 12 章 2 節には、「あなた方は、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全き事であるかを、わきまえ知るべきである」と書いてあります。更に、エペソ人への手紙 5 章 17 節には、「だから、愚かにならないで、主の御旨が何であるかを悟りなさい」とも記されています。

神の御旨を知る方法には二通りあります。一つは聖書の御言葉を通して、もう一つは聖霊様を通して悟る方法です。多くのクリスチャンが、聖霊様の導きに気付かないまま、機会を逸しています。どうすれば、聖霊様の導きを得ることができるのでしょうか。どんな優秀な先生でも、教えを受ける側にその気がなければ、成果を得ることはできません。同様に、私たちに聖霊様の導きを受けようとする熱意がなければ、何も起きません。

まずは、御旨を知りたいという決断が必要です。時には、夢や幻、そして御声を通して啓示してくださいますが、大抵は、直観や予感、確信や平安などを通して内的啓示を与えてくださいます。これらは、五感や理性や知性を通して得られるものではなく、聖霊様が私たちの霊に働きかけ、霊か心に働くことにより得られます。そして、願いを通して啓示してくださいます。ビリピ人への手紙 2 章 13 節に、「あなた方の内に働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」と記されています。だから、私たちは熱心に祈らなければならないのです。

次に内的啓示を受けたら、外的啓示を求めなければなりません。エリヤは手のひらほどの小さな雲が現われるまで、切に祈りました。その結果、イスラエルは 3 年半の干ばつから救われたのです。ペテロは異邦人に伝道することに強い抵抗感を持っていました。しかし、祈りの中で内的啓示を受け、更にコルネリオの使いが尋ねて来るという外的啓示を受けて、異邦人への宣教を始めました。祈り求めれば、外的証拠が与えられるのです。さらに、内的啓示と外的啓示を受けたら、御言葉と照らし合わせてみなければなりません。石橋を叩いて渡るように、御言葉との一致を求めるのです。

そして『平安』という心の審判官の声に耳を傾けましょう。神様が共におられる所は、何があっても平安が満ち溢れるはずです。逆に、表面的には平安であるように見えても、実際は崖っぷちに立っていることが多々あります。コロサイ人への手紙3章15節、「キリストの平和が、あなた方の心を支配するようにしなさい。あなた方が召されて一体となったのは、このためでもある。いつも感謝していなさい」とあります。さらに私たちは、神の平安が臨むまで切に祈らなければなりません。――「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなた方の求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなた方の心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。」（ピリピ4:6～7）

内的啓示を得、外的啓示を見て、御言葉との一致を確認し、神の平安があるなら、一切の躊躇を捨てて、大胆に出て行きましょう。聖霊様の知恵と判断力にすべて委ねましょう。聖霊様とチームになって働く時、必ず神の奇跡が伴うでしょう。聖霊様の導きが、愛する聖徒の皆さんと共にありますよう、イエス・キリストの御名によってお祈り致します。†

イ・ヨンフン牧師／ヨイド純福音教会

感謝は、イエス・キリストを信じる人々にとって基本的義務です。「すべての事について、感謝しなさい。」（Ⅰテサロニケ5:18）――この御言葉を信じる人は、すべてにおいて感謝する人生を生きるべきです。信仰の自由を求め、メイフラワー号に乗ってアメリカに渡った清教徒たちは、定着した当初は、寒さと飢えのゆえに大変な苦痛に遭いました。しかし、彼らは恨み呟くことなく、その年の収穫をお許しになった神に感謝し、礼拝を捧げました。彼らの信仰と生きることに対する情熱が、今のアメリカを生み出す土台となりました。感謝は、私たちの人生の暗い所を照らす光のようです。苦難の中でも感謝を捧げるとき、私たちの人生は変化します。

感謝の根拠

私たちは、あわれみと恵み豊かな父なる神のゆえに感謝することができます。神のあわれみと恵みがなければ、私たちはいまだに罪と絶望の中で生きていたはずです。しかし神は、私たちに救いの恵みを施してくださり、神の子としてくださり、恵みの中で生きるように導いてくださいました。この御愛こそが、感謝の根拠です。

ヨハネによる第一手紙 4 章 9 節～ 10 節の御言葉は、私たちを神の愛へと導きます。

「神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」

ローマ人への手紙 5 章 7 節～ 8 節の御言葉にも、私たちに対する神の愛が明示されています。

「正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。」

人間の愛は利己的であり、自己中心的であり、計算的です。しかし、神の愛は犠牲的であり、無条件的であり、一方的です。その御愛に報いようとしても、報いる術がありません。神は、救いを受ける資格のない私たちを、御子を犠牲にして救ってくださいました。それゆえ私たちは自己中心的、かつ自己満足の

生き方をするのではなく、神の愛を覚え、溢れる感謝を捧げる人生を生きなければなりません。

わが子が事故に遭った後にも、神に溢れる感謝を捧げたアメリカ医師テリー・コドンの話を分かち合いたいと思います。彼は心臓専門医で、子どもたちが学校の体育時間に、突然心臓麻痺によって亡くなるのを防ぐために、学校に自動体外式除細動器（AED）を設置した人です。

この働きのゆえに、コドンは 2002 年アメリカ心臓協会から、「今年のアメリカ心臓医」に指名されました。しかし、2009 年に思わぬ不幸が彼の家庭を襲いました。当時大学生だった、たくましくて丈夫な息子が交通事故に遭い、全身麻痺になりました。しかし、信仰の人であった彼は、激しい苦痛の中でも、息子の命がつながっていることに感謝しました。彼は、信仰によって苦痛を感謝に変えた内面の過程を、日記に記しました。その中で次のような箇所があります。

「11 月 26 日、今日は、第 388 回収穫感謝祭だ。一つ、収穫感謝祭は祝日ではなかった。ただ生きていることだけに感謝する人が、共に集まる日だった。私はこの５カ月間、毎日息子と接することができたことに感謝する。普段はそういう時間を持つことはなかった。しかし、おかげで息子と貴重な時間を持つことができた。また、息子の命を生かしてくださった主に、毎日感謝を捧げている。そして息子の聡明な精神が、そのまま残っていることに感謝する。この宇宙に偶然はない。私たちは、日々自身が享受している多くの祝福に感謝すべきである。」

彼は、たとえ息子が全身麻痺で寝たきりになるという状況におかれても、神にあって感謝すべき理由を見つけようとしまし

た。息子が生きて一緒にいられること――それだけで感謝するコドンの信仰は、私たちの魂に大きな響きを与えます。

感謝の内容

私たちは毎日神に感謝を捧げなければなりません。救いを受けて神の子としてくださったことに感謝し、生きる意味を悟らせてくださったことに感謝し、素晴らしい家族や友人に出会わせてくださったことに感謝し、素晴らしい教会に通わせてくださることに感謝すべきです。何よりも、無条件に赦してくださる神の恵みに、私たちは感謝しなければならないのです。

人間は本来､罪の固まりです｡罪ある者としてこの世に生まれ、罪の中で生き、また死んで逝く存在です。幼な子たちは教えてもないのに躊躇せずに嘘をつき､様々な悪い事をします｡それは、すべての人々が罪の属性を持って生れてきたからです。しかし、私たちがイエス・キリストを信じれば、罪の赦しを受け、神の前に義とされ、認められるようになります。そして、少しずつ主と同じ姿に変えられていくのです。この驚異的な御恵みに対して、私たちは毎日主に感謝し、罪を犯すたびに涙をもって悔い改めながら、御前に進み出なければなりません。

ダビデ王は、誠実な部下の妻を奪いました。しかも彼を戦争地の真っ直中に送り込み死なせるという、大きな罪を犯しました。それでも、彼が神から見て正直な王になれたのは、預言者ナタンが彼の罪を指摘した時、ひれ伏して激しく泣きながら悔い改めたからです。詩篇 51 篇には、彼の心を引き裂いて悔い改める祈りが込められています。

「ヒソプをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白

くなるでしょう。わたしに喜びと楽しみとを満たし、あなたが砕いた骨を喜ばせてください。み顔をわたしの罪から隠し、わたしの不義をことごとくぬぐい去ってください。神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。わたしをみ前から捨てないでください。あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。」（詩篇 51:7 ～ 11）

結局主は、涙を持って心から悔い改める真の祈りを捧げるダビデをお赦しになり、再び彼の礼拝をお受けになりました。神の赦しと御愛は、私たちのいかなる罪よりも大きいのです。罪を犯すことより大きな罪は、神に赦しを請い求めない罪なのです。私たちもダビデのように、時には罪を犯し、正しくない生き方をするときがあります。それでも私たちが主に立ち帰り、悔い改めるならば、愛の主は、私たちのすべての罪を赦してくださいます。

ルカによる福音書 15 章に出てくる放蕩息子の話も、限りない神の愛を示すものです。放蕩息子は父親がまだ健在なのに、自分の分け前の遺産を先取りし、父親から離れていきました。そして好き勝手に生きながら、遺産を全部使い果たしてしまい、物乞いのようになって父のもとへ戻ってきました。しかし父親は、彼の咎を指摘せず、息子を懐に抱いて、非常に喜びました。溢れんばかりの愛をもって、息子を赦したのです。そして、息子に最も良い衣を着せ、指輪をはめ、靴を履かして息子を取り戻したことを喜び、宴会を催しました。

神の愛は、まさにこのようなものです。罪を犯し、不義を行ない、放蕩した私たちをお赦しになるだけでなく、神の子としての身分を回復してくださいます。神の子となった私たちに、

たましいがいつも恵まれていると同じく、すべてのことに恵まれ、健やかになり、命を豊かに得る恵みを与えてくださいます。いかなる場合にも、私たちをお捨てにならず、最後まで支えてくださり、無条件に赦してくださる神の恵み、この限りない御愛に、私たちは常に感謝しなければならないのです。

赦し、感謝を実践する人生

私たちが生きている間、感謝、永遠なる感謝を捧げるべき理由は、聖く完全なる神が、傷ついたか弱い私たちをあわれんでくださるからです。詩篇 103 篇 10 節から 12 節は、神の愛とあわれみがいかに大きいのかが示されています。

「主はわれらの罪にしたがってわれらをあしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。天が地よりも高いように、主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい、東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。」

神は、私たちの弱さ、悩み、悲しみ、傷、すべてをご存じです。そして、このような私たちをあわれみ、『わたしはあなたを愛している。わたしはあなたを離れない。一生の間、あなたとともにいて、溢れんばかりの恵みと愛を注ぐであろう』と仰せられます。

この尊い御恵みを受けている私たちは、生きている限り、神に感謝し、受けた恵みを隣人に分け与えながら、生きなければなりません。マタイによる福音書 5 章 7 節に、「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう」とあります。この御言葉に従って、あわれみを受けた者として、これからは、他の人々をあわれみ、赦し、愛しながら生きなければならないのです。

バージニア・コモンウェルズ大学校の心理学教授、エバレット・ワシントンは、赦しを研究する赦しの専門家です。彼は 10 代に、母親が強盗により殺害されるという事件に遭い、大きな衝撃を受けました。しかし、自身の弱さと主イエスの愛の深さを悟り、心を引き締めて強盗を赦す決心をしました。辛い過程を経て、強盗を赦せるようになった彼は、今でも学生たちに、赦しの意味を教えることに最善を尽くしています。彼は、赦しの意味について、このように述べます。

「赦しは、キリスト教の核心だ。神様は、慈悲と限りない愛を持って、イエス・キリストの十字架の死を通してお赦しになる。赦しを受け入れた人は、感謝の反応として、自分に害を加える人たちを直ちに、なおかつ持続的に赦すようになる。感謝こそが、神の赦しと生ける水が他の人々へ流れて行く通路だ。」

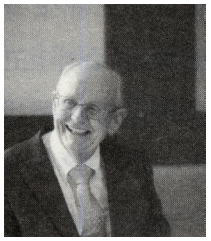
恵みに対する私たちの反応は感謝であり、感謝の実践は赦しです。主イエスが私たちをお赦しになったように、私たちも隣人を赦しながら生きなければなりません。赦す私たちの姿を通して、世は感動を受け、神を知るようになるでしょう。

神は、私たちをあわれんでくださり、救ってくださり、神の子としてくださいました。それゆえ、私たちは神の恵みとあわれみに対して絶えず感謝し、私たちが受けた愛を隣人と分かち合わなければなりません。私たち皆が、苦難に遭っても感謝し、敵をも愛し赦す、真の感謝の人生を生きる時、主は私たちに大いなる恵みを注いでくださいます。

『絶対肯定』、『絶対感謝』は、私たちの唇からいつまでも絶えてはならない、信仰告白です。✝

ヘンリー・グルーバー牧師の
主と歩く

勝利するまで落胆せずに祈り続けなさい



ヘンリー・グルーバー
（Henry Gruver）牧師

「世を歩くとりなし祈祷者」で知られた筆者は 18 歳の時からアメリカのアリジョーナ州フェニックスの犯罪多発地域で主と共に歩き始め、今も主と共に歩いている。彼は全世界のどんな場所でも、出会った人たちのために祈り、福音を伝えている。彼の人生には超自然的な不思議が多くあったが、より大事なことは、彼が主の御言葉に従順しながら歩き、祈っているという事実だ。

「だから、へびのように賢く、はとのように素直であれ。」（マタイ 10:16 後半）

キリストが復活された後、神の国は常に勝利し続けてきた。帝国は立ち上がっては消えていたが、神の国はいつも勝利してきた。政治的な王国は消えても、霊的なキリスト王国は永遠であり、続く歴史の中でも勝利してきた。

神の国は政治的な王国ではなく永遠なる御国であるが、帝国の興亡盛衰とキリスト教の復興や衰退は、ある程度その軌道をともにしている。キリスト教に対して友好的帝国が繁盛すれば、キリスト教もともにリバイバルし、福音は急速に伝わる。しかし、その帝国が道徳的堕落などで衰弱すれば、全世界的にキリスト教の勢いは弱まってしまう。

1914 年、キリスト教国家である大英帝国が世界の最強国であった時、世界人口の 34%がクリスチャンだった。しかし、二度の世界大戦が起きてイギリスが衰退した後、世界キリスト教人口は、1970 年に世界人口の 24%に減少した。しかし、1970 年からアメリカで大きな宣教運動が起きて、2015 年には 33%に増加したのも、このようなパターンによるのである。

アメリカの宣教運動により、1970 年に全世界のクリスチャン人口は 10 億２千万人程度だったが、今は 20 億６千万人になり、２倍を超える成長を成し遂げた。今もヨーロッパとアメリカの一部の地域を除けば、全世界は歴史的に由来のない輝かしいリバイバルを経験している。2017 年現在、世界の大半の地域で、人口の増加数よりクリスチャンの増加数が早く伸びている。

アメリカは個人の自由を尊重する。個人が自分の望むやり方で神を礼拝し、自分の信仰を表わすことを許容する。だから、教団が多いという弊害もあるが、聖霊が自由に働かれる教会文化を育成する背景にもなる。過去 40 ～ 50 年間のキリスト教のリバイバルは聖霊によるものだということや、アメリカが世界最強国として世界宣教の 80%を担っているという事実は、そのような意味から関連がある。

世界は今、とても大事な変化の時期に突入している。歴史的に見れば、キリスト王国は結果的にリバイバルしてきたが、時代によって浮き沈みがあり、この浮き沈みは世界の覇権を掌握している国家の宗教性向に関わっているということは、だれもがわかりうることだ。アメリカが今より衰落すれば、歴史的前例を見る限り、全世界的にキリスト教は委縮され、イスラムはその勢力を拡張していくだろうと、キリスト教研究家たちは予測している。2000 年代に入って中国が急速に成長し、アメリカ

でキリスト教が衰落してから、中国とアメリカ間の衝突確率が高まっている。歴史を見れば、新興国家が浮上し、既存の覇権国家と争えば、戦争が起きる確率が 70%だという。

アメリカが世界的経済恐慌と第二次世界大戦、そして朝鮮戦争を祈りによって勝利し、世界最強国となった後、苦難や貧しさを知らない世代になり、彼らは主を拒む世俗的文化の中で育った。歴史学者たちは、アメリカの国力が急速に衰落して行けば、2020 ～ 2025 年頃にはアメリカの衰落とともに世界至る所で紛争が起きるだろうと予測してきた。しかし、アメリカを再び偉大な国にすると挑むトランプ大統領の登場によって、流れは変わってきている。

トランプ大統領が、アメリカを再び偉大なキリスト教国家に復旧させることを主がお許しになるなら、世界はこれからも平和の中で、キリスト教伝播に力尽くすであろう。

アメリカ教会は 45 代大統領を選出する選挙を前にして、もう一度チャンスをくださいと切に祈り求めた。主はその祈りを聞き入れてくださった。アメリカは再びチャンスを与えられた。どんな危機が訪れても、どんな代価を払ってでも、私たちはアメリカに与えられた、山上の輝く都市になりなさいという使命を果たすために、前進する道を選んだ。

どんな苦難と代価を払ってでも、アメリカがもう一度偉大なキリスト教国家に回復してこそ、世界の平和が保たれ、福音を伝えることができるからだ。今まで世界の至る所に蒔かれた福音の種が成長していくためには、世界の秩序と平和が維持されなければならない。

今、北朝鮮の核問題でアメリカと東南アジアで軍事衝突の緊張が高まっているが、その背景は中国の浮上とアメリカの衝突

であるとみられる。聖書は私たちに、「へびのように賢く、はとのように素直であれ」（マタイ 10:16 後半）と言われる。

敵を知ろう

第二次世界大戦に参加した私の叔父は、ソ連軍が連合軍を助け、第二次世界大戦の勝利に貢献したといわれているが、それは大げさなことだと話していた。叔父の話によれば、ドイツ軍はソ連軍との戦闘の際、指揮官一人を集中的に狙っていたという。戦闘を指揮する司令官が死んだら、残されたソ連軍たちが互いに協力し合い戦闘に臨むべきだが、彼らは自分が指揮官になろうと争いながらうろたえていた。だからドイツ軍に負けてしまったという。

私はソ連に入り、地下教会と協力して聖書を届ける仕事をしたことがある。その時、聖書を 2 台のトラックに分けて移動した。トラック運転手は、政府に発覚されれば苦難に遭うことも承知のうえで、志願してきた地下教会の聖徒たちだった。しかし驚いたことに、移動を始めると、２台のトラック運転手たちは互いに先頭を争いながら疾走した。このトラックが先を走れば後ろのトラックがスピードを上げて追い越し、追い越されたトラックはさらにスピードを上げて追い越そうとした。この二人は遂に、運転の最中にこぶしを振り回しながら自分たちの言葉で威嚇し会っていた。

私はソ連軍や警察の目につくのではないかと心配だったが、彼らはあきれたことに、聖書を運ぶ仕事は自分が主導する、と大声で怒りながら疾走し続けた。第二次世界大戦中に、司令官さえ死ねば、役立たずの軍隊になったという、叔父の話が事実であったことを、危機一髪の現場体験を通して覚えた。ソ連軍の弱点を正確に把握し、適切に生かしたドイツ軍は賢明であった。

聖書は私たちに鳩のように素直でありながらも蛇のように賢くあれと言われる。私たちは敵を知らなければならない。敵は私たちのことを熟知している。私たちの弱点を正確に把握していて、その弱点をしつこく攻撃してくる。教会の危機は豊かで平和で、なおかつ力のある時に訪れる。苦難の中では切に主を求め、祈りに集中しつつ、自分の使命を確かに悟り果たすことができる。しかし豊かで平和な時に教会は、神に対する初めの愛と召命には関心がなく、非本質的なビジョンや欲求に教会の関心を分散させ、力を消耗してしまう。

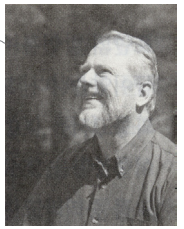
アメリカという国を非キリスト教、社会主義国家に変えようとする大きな勢力が存在するという事実や、アメリカでクリスチャンたちが実際に迫害を受ける直前、アメリカ経済が負債のゆえに破滅寸前に救われたことも知らない人が多い。最も危険な癌は、命が危くなるまでまったく痛みを感じさせず、ただ大きくなる癌だ。アメリカのような堅固なキリスト教国家で、同性結婚を合法化させた勢力は数十年間、教会ではなく、教育、言論、司法、政治、経済を掌握しながら勢力を伸ばしてきた。

その間、アメリカは世界最強国であったし、小さな教会の牧会者でも経済的な困難に陥ることは殆どなく、この勢力が教会を直接攻撃することはなかった。教会は、この勢力が伸びていることを知っていながらも、同性結婚が合法化されるまでまったく痛みを感じなかった。教会が痛みを感じた時、この勢力はあまりにも大きくなりすぎたため、あたかも死を宣告されたように感じた。

事実、同性結婚合法化は氷山の一角にすぎない。水面の下は莫大な反キリスト教的勢力が存在しているということだ。主は、希望が見出せない時にも、最後まで祈り続けなさいと仰せられ、最も暗い時に逆転勝利をお許しになった。†

イエス院四番目の講義プロジェクト　統一時代を開く

ベン・トレイ／イエス 院理事長、サンスリョンセンター本部長



準備過程における進歩

このコラムを購読してこられた読者でしたら、2005 年に私と妻が、北朝鮮の解放を準備する目的で韓国に戻って来たことをご存じのはずです。私たちはその準備の場所として、テベクにあるイエス院に戻り、サンスリョンセンターを受けもつことにしました。その準備過程の一つは､分断された地を一つに回復させ、癒す過程を担うはずの「統一世代」を育成する命の川、学校を建てることでした。そのサンスリョンセンターの最初の建物が完成し、そこに入りました。これについて、このコラムに書いたことがあります。一歩一歩の歩みは、準備過程における一部分にすぎません。まだ必要な過程が残されているのは事実です。

しかし、本格的に準備するために必要とされる、サンスリョンセンターという巨大なプロジェクトを終えるにあたって、最近、とても励みになることが三つありました。これらの出来事は、それぞれの準備過程において重要な歩みです。そこで私が、小さいながらも役割を担うことができ、とても光栄に思います。

一つ目は、8 月末にハワイ・コナのイエス伝道団（YWAM）世界大学で開かれたコンファレンスです。私たちは、簡単に「コナの統一フォーラム」と呼びます。韓国世界宣教協議会（KWMA）が主催したこのフォーラムの目的は、北朝鮮の牧会者たちと教会宣教団体のリーダーたちが、一つの場所に集い合うことでした。サタンは、イエスの御名によって北朝鮮の働きに携わる人たちを持続的に攻撃しています。分裂させようと必死です。こ

のフォーラムの特殊な点は、普通は共にするはずのない人たちが、一つになったということです。北朝鮮を再び建て直し福音を伝えるためにも、このように集い合い一つになったということは、非常に重要な一歩です。これが、一回きりのイベントではなく、多様な団体が互いにより深く連結し理解し合うための始点となったことに、大きな意味があります。この関係がより深まり、北朝鮮の働きに関心を寄せ、使命感のある人たちが、より多く参加されることを期待します。

二つ目は、9月初めに新約聖書をピョンヤン（平壌）語で訳された初版本を、出版社から直接受け取るという特権と喜びを味わいました。この翻訳本は、キム・ヒョンシク教授が平壌聖書研究所（PBI：Pyongyang Bible Institute）を通して成し遂げました。キム教授は私にとって、長い間友人であり、メンターです。彼は、平壌にあるキムヒョンジクピョンヤン師範大学で教授を務め、キム・イルソン家紋の家庭教師でもありました。今はアメリカのバージニア州フェアファックスに住んでいます。愛する同胞たちのために、母国語で聖書を翻訳すること――これが彼の一生における最後の宿願事業でした。彼は最近、新約聖書を完成し、それは、ホンソン社で「神の約束―イエス続編」という題名で出版されました。

北朝鮮で用いるために準備したいくつかの聖書翻訳本がありますが、北朝鮮の言語と文化に精通した北朝鮮学者が翻訳したものは、今回が初めてです。他の翻訳本は韓国語聖書を改訳したもので、しかも標準のピョンヤン語を知らない人たちが訳したがゆえに、北朝鮮の人々が理解し難い単語や聖句が多かったです。それでも北朝鮮の人々の手に入ったすべての翻訳本を、神が用いてくださるよう祈っています。今回、このような素晴

らしい聖書が出版され、とても嬉しいです。

この聖書は、英語を学べるようにピョンヤン語と英語、ふたつの言語が一緒に書かれています。これによって、北朝鮮でもっと幅広く使われる道が開かれるでしょう。また、韓国の人も、北朝鮮の標準語に親しめるという意味でも、非常に価値のあるものだと思います。韓国の人たちがこの聖書を個人黙想や聖書勉強に用いることを勧めます。そうすることによって、北朝鮮の言葉の感じやニュアンスに慣れてくるでしょう。それは、韓国と北朝鮮の連合を準備する過程において、非常に重要な段階です。

また、教団協議会ではこの4年間、この作業が光を浴びるよう後援を惜しみませんでした。このことについて、キム教授は、PBIに代わって深い感謝を表ずる特権が与えられました。けれどもこれが私にとって特別なだけに、キム教授が直接出席することができなくなり、私が代わって出席したのは悲しいことです。彼は、6月に起こった深刻な脳出血により、しばらく集中治療が必要でした。彼の状態は日ごとに悪化していき、ホスピス治療や死を準備しなければならないほどでした。お葬式を準備しなければならないほど､彼の状態は芳しくありませんでした。しかし、神をほめたたえましょう。これが終わりではありません。今は、非常に良くなって、自宅で治療を受けています。最近、彼と電話で話をしましたが、声が明るくなりました。彼の最後の使命である旧約聖書を翻訳するほど、状態が回復されたわけではありませんが、80歳を越えた彼の年齢を考えると、驚くほどのスピードで回復しています。旧約聖書の翻訳本が完成されますように、完全なる回復が与えられますように、お祈りください。

北朝鮮の生活と文化について、そしてキム・ヒョンシク教授の驚くべき感動的な人生についてより知りたいと思われる方は、

ホンソン社で出版された彼の自叙伝「80年、7万里」をお読みください。

北朝鮮が解放された時

私が参加した三つ目の行事は9月に統一韓国構造及びネットワーク（Korea Reconciliation Initiative and Network：KRIN）国際会議が開かれたことです。ヨーロッパ、南アメリカ、アジアの代表たちが共に集まり、3日間、北朝鮮について勉強し、解放の時を準備しました。北朝鮮の解放を準備する過程において、初めから私が望んでいることとは異なるものが多くありました。ここ何年間、私自身の限界にぶつかり、私がとうていできないことについては、主を信頼するしかありませんでした。ところが、今回の会議で、大事なことだと思いつつも、私ひとりではどうしようもないと思うことについて、他の人々が話すのを見て本当に嬉しかったです。本当にその働きが神の嗣業であるならば、神は人々を引き寄せ、必要な資源を集められます。

特に、北朝鮮の核開発や高まるアメリカとの葛藤による地政学的状況に大きな関心が寄せられる時期に、多くの人が戦争や様々な危機的状況に対する心配をしています。KRINが提起した諸々の問題の中で、深刻な危機に置かれたこの時期に、いかにして助け合い準備すべきかを話し合いました。韓国や国際的観点からも考え、顧慮しました。と同時に、治癒や和解のための方法についても研究しました。また北朝鮮が解放された後、いかにして北朝鮮内部に福音を届けるかについても考えました。さらに、実質的な問題とそれを解決する方法についても話し合いました。

この会議が、本当に感動的だったのは、韓国に定着した脱北

者たちが大勢、参加されたことです。彼らが持つ誤った推測を正すきっかけにもなりました。北朝鮮に残された家族や友人、他の人たちに対する彼らの気持ちや希望を分かち合いました。彼らは、北朝鮮に戻って、自分たちが体験した福音の喜びを分かち合いたいと、強い熱意を表しました。脱北して韓国に住む彼らこそが、北朝鮮に対する知識の源泉であり、解放後に北朝鮮に入り、福音を伝播する先鋒隊になるだろうという事実が、はっきりと見えました。彼らは、私たちに教えることが多く、北朝鮮の宣教の道を切り開いて、導かなければなりません。

北朝鮮が解放された時、現地の聖徒たちと連結されるべき、実際的な必要も見えてきました。彼らを利用したり、彼らに馴染めない文化を無理やり強要したりするのではなく、学び激励し、謙遜な心で彼らと共にするのが、非常に大切になるでしょう。北朝鮮の教会は、私たちとの経験と知識を生かし、彼らに最も適した形態を自由に模索しながら、彼らの固有の姿に立ち返らなければなりません。これは、誰にとっても簡単なことではありません。しかし、これが、私たちを真理へと導くために、私たちが理解できる言語や方法を用いて、天より人間の環境の中に入って来られたイエス・キリストの心です。完全なる主が、不完全なこの世に来られ、人間の姿と同じになられたのなら、不完全な私たちは、北朝鮮の兄弟姉妹の人生や世間に、謙遜に、より深く入っていくべきではないでしょうか。

神が、北朝鮮の解放に、より身近に私たち皆を呼び寄せられることと、そのすべてを通して神がその準備のために働いておられることを見ながら、本当に慰められました。神をほめたたえましょう。†

主イエスと私が一緒になれる時

数日前、親しくしていた弟子と一緒に食事をした。私と出会う前の彼は、おっとりして物静かで目立つことはなく平凡に大学に通う学生だった。しかし、神様の御言葉と祈りの中で、少しずつ信仰が成長し、ある日突然大学を辞めて神学校へ入学した。私はそんな彼に驚かされた。

彼は突然、神の御言葉を聞き、その御言葉を受け入れ従ったのである。感動にあふれる出来事だった。世の中の成功よりも、神様の御心にすべて従うことにしたのだ。主なるイエスの御旨に入った人。その人は、平坦な道よりも主なるイエスの道を選んだのだ。彼が神様を臨む道を歩むことは、牧師として働いている私にとって本当に胸が熱くなるほどの喜びだった。一方で、神様から与えられた狭き道を彼が歩み出している姿をみていると、その道を一足先に先輩として歩んだ私は一抹の責任感と重荷を感じる。彼のために、いつも祈っている。

彼は神学校に入学して間もなく、肉体的な試練に直面した。さらに、裕福な家庭が崩壊し、愛する人と別れることになり、とても辛い日々をおくった。神様から与えられた試練に、苦しみもがいている姿をみて、私は自分のことのように胸が痛み、辛かった。彼は、心身共に弱くなっていても、神学の道を黙々と進んでいった。とても長い道のりを行ったり来たりしながら、自分に課せられた働きに不満も漏らさず、弱音も吐かない彼だった。教育伝道師として誠実に働き、今年からは専任伝道師になった。

私は、彼に専任伝道師になられてどうですか？と聞いてみた。彼は、しばらく考えて言葉を選ぶように答えた。「先生、専任伝道師になってから、僕はやっと分かったことがありました。僕は、長い間、説教だけをする平信徒だったのです。」
そんな彼に、私は笑顔で「専任伝道師になることは大変だけど、さらに、開拓牧師になることも考えてみなさい」と話した。

子どもたちの多くは、自分の親に対して何かしらの恨みを持っている。親から受け継いだ先天的な限界や家庭の物質的な限界。前向きになれず、なかなか進まない状況と進路への迷い。様々のものに不満を持っている。しかし、そんな彼らも親になっていく。振りかえると、子どもの頃の不平不満は、本人にはどうにもできないこと、状況だったことがわかる。良くなかった時代がすべてを悪いだとはいえないことがわかるのだ。むしろ、貧しい時代、物が足りなかったことで謙虚さと謙遜を身に付けたことに気が付く。自分が親になったときにわかることだろう。

多くの若者が大人たちを評判する。政治、経済、福祉と教育分野でも否定的に言い争う。彼らが大人になった時、若い時に思い描いた批判に対する代案が、妥当なものでなかったことを切実に感じるだろう。多くの教会で信徒たちが教会の教役牧師に対して、不平不満、否定的な思いをもつことがある。私自身

も小さな教会の担任牧師であり、教会の信徒たちの願う様々な思いや求めるものに、苦しくなる時が度々ある。否定的な信徒たちも、もし、教会で働く職分を与えられ、役を勤める立場になったならば、これまで口にした不平不満、否定的な評判は考えなくなるだろう。軽く呟いた言葉がどれだけ浅はかなものだったか気が付くだろう。神学校で学んでいるまだ十分でない知識、セミナーなどほんの短い経験からでも教会を悪く評判することはできる。しかし、自分が教会の担任教師になれば、周囲からの悪い評判よりも、神様の御前での涙の祈りの重要性が身にしみるだろう。

主なるイエス・キリストの見方

私たちの心を真っ直ぐに前進させよ。自分の考えと、自分の判断と評価をイエス・キリストの目から、改めて見つめ直したらどうなるだろうか？もちろん私たちは、永遠なるイエス・キリストの位置には届かない。聖書の御言葉、イエス・キリストの御言葉に心を打たれ、聖霊の導きの中、主イエスのみ旨を心に刻んで受け入れるならば、父の胸に戻ってくるだろう。自らの欲望のために堕落に落ちていった放蕩息子が悔い改めたように。また、銀貨 30 枚でイエス・キリストを裏切ったユダの心が、全財産ほどの値打ちがある香油をイエスに注いだ女の心が、主イエスに出会えるならば、私たちは父の胸に戻ってくるだろう。私は、「だれを遣わそう。誰が、われわれのために行くだろう」といっておられる主の声をきいた。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」と叫ぶイザヤの信仰になることだ。（イザヤ書 6：8 節）

神様の数えきれない愛は、私たちの霊と生き方の中で、数えきれないほどの感動、恵みの光、そして、悔い改めに導いてくれる。幼い子どもが大人になる、青年が父親になる、教会でただ腕を組んで眺めている信徒がリーダーになる時、受ける立場から涙の祈りを捧げるようになる。兄弟姉妹に執り成し祈りをする信徒になるだろう。そのような過程で、信仰は伸びて成長する。言い換えれば、私たちは少しずつ、イエス・キリストの御旨に入って、神の御国を待ち望むように導かれる。

今日も私は、争い、心を痛みながら望みを持って祈る。私に与えられた一人ひとりの祈りの題目、彼らの問題と厳しい状況が良くなることを祈っている。私は、問題と厳しい状況から彼たちが脱出するだけを求める祈りだけではなく、主イエス・キリストの見方で祈る。私たちの身代わりとなられたイエス・キリストの苦しみとキリストの涙を胸に抱いて祈る。主の恵みをもって祈る。

今日も誰かが、父の背中に背負われ子どものように、長旅でのどの渇き、心地悪いと、不平不満を口にする。しかし、私は、私の罪の身代りになったイエス・キリストの手足から流される血と汗をみる。「私は、未だに主なるイエス・キリストに重荷なる苦痛を残している！」主なるイエス・キリストの肩から重荷を下げ降ろし、十字架の苦痛を共に背負う。

もっと前に進み、私のすべてを捧げる時、誰かの重荷を背負っている主なるイエスを見る。自分の小さな苦痛から立ち上がって、私たちの身代りになった主なるイエスの涙と共にするとき、私たちは主なるイエスと一緒になれる。主なるイエスの願いが私たちの願いになれる。イエスの御旨で私たちは一緒になれる。その時こそ、クリスチャンとしてよばれる時だろう。†

冷蔵庫の奥に隠れていた感謝

イ・ゴンスク
小説家

80歳近くになった私に、最近とても不思議なことが起きた。冷蔵庫を開けるたびに、「感謝します、オー主よ！感謝します」と、自然に感謝の言葉が出てくる。このような私を見て、家族は認知症ではないかと心配する。それでも、私は毎日冷蔵庫を開けるたびに、感謝すると連発している。だからといって、高価な食べ物や特別な料理が冷蔵庫に入っているわけでもないのに……。このように感謝を連発していると、息子が不思議に思い、首を傾げる。「お母さん、冷蔵庫を開けながら、どうして感謝するというのですか？冷蔵庫に美味しい物でも入っていますか？」このように言う息子に、私はただ微笑むばかり。

この息子がおむつをつけてあちこち走り回り、いたずらをしていた昔の姿が思い浮かんだ。その頃は本当に大変だった。夫は勉強すると言って学校に行ってしまい、まだおむつも取れない年子の二人の息子はぐずついた。私は白人教会で住み込みで働いていたが、毎日山積みの仕事で追われていた。庭の草むしりもしなければならないし、高齢者のための遊び道具や椅子などを、使いやすく配置して置かなければならなかった。また、昼食後の皿洗いは済ませてくれるものの、流し台や使い済みの大きな鍋などは私が磨かなければならなかった。子どもたちは

幼くて、泣いたり走り回るばかりで、ママを配慮する年ではなかった。やむを得ず、教会の庭にある木に、子どもの腰を紐で縛りおもちゃを放り投げておき、信徒たちに仕えた。年子の二人の息子は、まるで双子のようだった。上の子は私の関心を引こうと、弟と同じおむつをつけたがるし、牛乳も哺乳瓶に入れて上げなければ、うるさかった。春になると教会の庭には、水仙やランの花が咲き誇って、とても美しい。夏には薔薇の花が満開になる。しかし、私には花を見て楽しむ心の余裕はなかった。毎日忙しく動き回っていた。夕方になると、ヘトヘトになった私の前に現れた夫は、勉強で疲れ果てていた。教会の仕事や子どもの世話をする余裕はなかった。教会の社宅は、ワンルームにエアコンもなく、夏の暑さで息もできないほどだった。当時、夫の大学学費はとても高かった。教会からの謝礼金は、お部屋一つと食費、それが全部だった。夫と私は学費を稼ぐために、地元の新聞に掲載された日払いのバイトを探し、肉体労働もしなければならなかった。まさに命がけの格闘の日々だった。

70年代の戦後の韓国はとても貧しくて、留学生に許諾されたお金は外国為替銀行からの100ドルだけだった。だから、南大門市場の裏にある闇業者から両替して持って行く時代だった。子どものミルク代や些細な費用はいくら節約しても高が知れている。やむを得ず、私たち夫婦の食費を削って子どもの食品代に当てた。塩だけでご飯を食べるときもしばしばだった。特に、安いキャベツをよく食べた。

そんな中、収穫感謝祭の明け方にドアを開けると、ドアが開かなかった。無理やりにドアを押し出して開けてみると、ドアの前に山積みの缶詰が置いてあった。70年代初期の米国は、非常に貧しかった。白人の信徒たちは、アジアから来ている留学

生を支援するために、保存食として家に置いてあった缶詰を集め、持ってきてくれた。それでも、貧しかった彼らにとっては、大きな施しであった。私たちにはとても助けになった。その時に飽きたからか、今でも私は缶詰を手に取らない。

ある日、雨が激しく降る夜だった。フィラデルフィアの豪雨は、常に雷を伴ってうるさい。夫は、こういう天候のゆえに学校から帰宅できず、子どもたちは眠ってしまった。一人でひざまずき祈りながら、激しく神に反抗する祈りを捧げた。「神様、どうして私をこんなにも貧しい神学生に嫁に行かせたのですか。どうして私をこの男に強制的に嫁がせ、こんなにも苦労させるのですか。とても悔しいです。友たちはみんな医師や銀行員（6、70年代銀行は、最高の花婿候補だった）に嫁いで贅沢に暮らしているのに、なぜ私はこのようですか。韓国動乱で経験した空腹も足らず、太平洋を渡ってきてまで、このような空腹を経験しなければならないのですか。とても悔しい。本当に悔しいです。主よ、あまりにも酷いです。」

吹きつける嵐と雷を背負って座り、悲しさのあまり泣きながら、神にあれこれ不平不満を吐き出していたその時、突然、暗闇の中から男の声が聞こえてきた。あまりにも暖かくて優しい声だったので、私はびっくりして頭を上げて部屋の中を見回した。すると突然、暖かい温もりが私を包み込み、霊魂までも温かくなった。「あなたの一生涯、鼻から匂いがするほど食べ物を与える。だからつぶやくな」

これは、私が初めて聞く神の御声だった。魂に平安か臨み、そのまま眠ってしまった。その後、その事実をすっかり忘れ、私はとても忙しく走り回った。夫が博士号を取得した。私も、学費が高くて韓国の学生はとうてい通えない私立大学で修士号

を取得した。そして韓国に戻り、牧会の忙しさに、十字架に後押されて過ごしていた。

ブレーキが故障した車のように、休まず走る加速度により、左右を見回す余裕もなく走ってきた人生の道程だった。今、夫婦が生活現場から退き、息つくようになった。背負っていた重荷が年と共に一つふたつ減っていき、今は背中が軽くなったが、腰を上げようとしたら、腰が曲がっていた。今になって翼を広げ、思う存分空を飛ぼうとするが、翼が曲がってしまい、青い大空に飛び立つことができなかった。

再び神に向かってつぶやき始めた。人生の道を振り返ると、とても円筒し悔しくて、夜も眠れず不眠症に苦しんだ。しかしある日、ふと冷蔵庫を開けた瞬間、食べ物の匂いとともに優しい主の御声が聞こえてきた。「あなたの鼻から食べ物の匂いがするほど与えているのに、なぜつぶやくのか。」

20代に聞いたその声だった。ああ！そうだね。私は非常に多くの祝福を受けている。韓国動乱の廃墟のなかで、あまりにも空腹感に兄と隣に座って、「白いご飯にコチュジャンを入れたビビンバ（混ぜご飯）を食べられるなら、今、ここで死んでもいい」と言っていたのに……。アメリカ留学時代は缶詰で延命していたのに……。今は冷蔵庫に食べ物がいっぱい入っているではなか。

収穫感謝祭の明け方、ドアの前に山積みの缶詰の上に置いてあったメモが、目の前に鮮やかに浮かび上がった。「私たちがあなたに与えた愛を後に、他の人々に伝えてください。」

80歳を目前にした私は最近、毎日冷蔵庫のドアを開けながら感謝を連発する。うちの冷蔵庫は、これまですっかり忘れていた感謝を見つけてくれた。†

御言葉のために感謝します

ペク・ウンシル
作家<御言葉を植えつける家族>著者

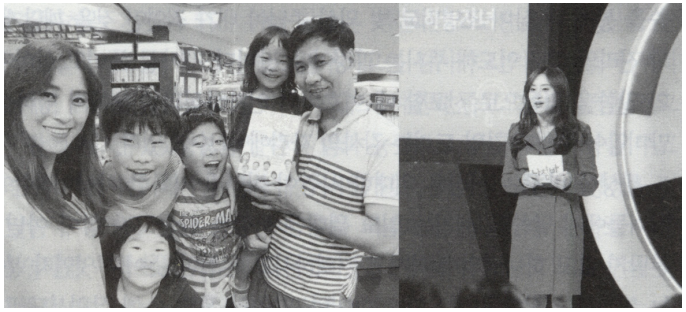
作家、牧師婦人、講師など私を指す多くの名前があるが、最も誇りを持って価値を付与する呼称はまさに「御言葉を植えるママ」だ。神様は、私たちの家庭に2男2女を賜り、その嗣業を任せてくださった。資格もなく足りない母親が、四人の子どもに御言葉を植え、聖書を食べさせ、祈りを着させる座に導かれたということは、救いの恵みを受けたからの私の人生における最高の感謝すべきことである。すべてが主の恵みであると告白し感謝する。

2005年1月1日に一番目の子どもを賜わってくださった。新米ママだった私にとって、育児は終わりの見えない荒野を、恐怖と焦りで歩く孤独な道だった。

「砂漠が美しいのは泉を隠しているからだ。」星の王子様の台詞のように、育児に疲れ果てた砂漠のような私の人生が、美しいと悟らせてくれたきっかけになったものがある。『303ビジョン聖書学校』だ。助け導いてくれる人がいなかった時に出会った『303ビジョン聖書朗読学校』は、荒野で発見した泉のようだった。ここで私のメンターであるヨ・ウンハク長老様に出会ったことも、神の驚くべき摂理であり、私の人生のターニングポイントだった。

303ビジョン聖書朗読学校のユニケ過程は、母親が6週間に100節の御言葉を暗唱するプログラムだ。養育者の殆ど母親のために、先に御言葉の恵みを経験して後、子どもたちに御言葉の暗唱教育をする。そうして子どもたちを神の兵士に育成し、主の御国を拡張していく、というビジョンを持っている。私も、先に御言葉を食べる母にならなければならなかった。2年という時間の間、600節余りを暗唱し、御言葉の甘さに夢中になった。シェマの御言葉、申命記6章4～9節を暗唱するとき、育児によって生じた渇きや悩みが一気に解決された。私は信仰の家庭と共に、次の世代を建てていくという召命に、使命感を持つことでその召命に応えることができた。

乾いた地に夕立をもって潤すように、御言葉の恵みの雨でしっとり濡れ、任された子どもたちに蜜と蜂のしたたりよりも甘い神の御言葉を食べさせ始めてから、今年で12年になる。主は渇いた魂を満ちたらせ、飢えた魂を良き物で満たされるからである、と告白した詩編著者のように、主は私の人生に奇跡と恵みを施してくださった。御言葉によって私を変えてくださり、家庭礼拝と御言葉暗唱が我が家の文化に定着し、また、御言葉を



主日に主の御業に献身する夫と愛らしい子供たち、オンユ、ジョイ、サラン、シオンと一緒に私たちは言葉を植える家族である（左）。
御言葉の暗唱について講義するたびに強調することは暗唱は選択ではなく、神様の命令だということだ（右）

コミュニケーションとし、御言葉が我が家の基準となるようにしてくださった。恵み深くいつくしみ深い主に、賛美と感謝と栄光を捧げる。ハレルヤ！

「御言葉を植えるママ」になって「御言葉を植える家族」になるまで、順調な道を歩いただけではない。多くの困難や苦難が立ちはだかった。落胆し疲れ、あきらめたくなる時もあった。私の計画と思うようについてこない子どもを見て、ため息をする時も多かった。子どもたちに御言葉を植えることは、涙で種を蒔く過程だ。聖なる労苦と努力なしに、決して簡単に得られるものではなかった。私は植え、水を与えるが、成長させてくださるのは神様だのみであり、御言葉の豊かな実を結ぶまで、全面的に神の恵みなしには不可能だ。日々激しい霊的戦いのゆえに、御言葉をおろしたくなるときも多かった。しかし、御言葉を植えることを続けられたのは、子どもに譲り渡せる最も貴重な遺産が御言葉であると悟ったからであり、毎日共にいてくださるイエス様の愛のゆえだった。

御言葉暗唱は信仰訓練

御言葉の暗唱となれば、だれもが一つは苦い思い出を持っている。修練会で聖句暗唱ができず、ご飯を食べられなかったこと、教会学校で暗唱できずプレゼントをもらえなかったことなど、楽しく嬉しかった記憶より大変難しかったという思いが、まず浮かんできて、御言葉の暗唱を回避する人が多い。また、自分の好きな御言葉、祝福の御言葉だけを選んで暗唱する人がいるが、ほとんど暗唱の誤解と偏見により生じる副作用である。御言葉暗唱は選択の問題ではなく、神の御命令であり、主イエスの御教えである信仰訓練だ。私の好みに合った御言葉だけを、

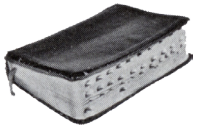
偏食するように暗唱し、祝福を期待するようなものではない。祈りは自分の願いを主に貫徹させるのではない。神の御心を求めて従うように、御言葉の暗唱も、心の中に御言葉を刻み込み、その御言葉を通して自分の人生に照らし合わせてみる。すると光である主は、私が罪人であることを悟らせてくださり、光と真理の道へと導いてくださるのである。日々、自我を殺し、生きておられる神の御言葉を信仰をもって宣言するとき、主のいつくしみと人々に施される奇跡の御業によって、私たちは主に賛美をささげる感謝の座にいられるのである。

世の中を変える人は、偉大な人ではなく、聖なる人だという言葉がある。子どもたちに御言葉を刻むことだけが偉大な人を作るのではなく、この世と妥協せず、何が善であり、神に喜ばれかつ全きことであるかをわきまえ知る、聖なる人に育てるためだ。御言葉の洪水の中に生きながらも、御言葉を信じることができず、すぐ目の前に見える現実と状況に踏みとどまっているときが、どれほど多かったのか。御言葉の暗唱と黙想を通して、御言葉の力と能力を知り、御言葉の約束と希望を信じ、その御言葉に従って進むように導いてくださった主の恵みに感謝する。

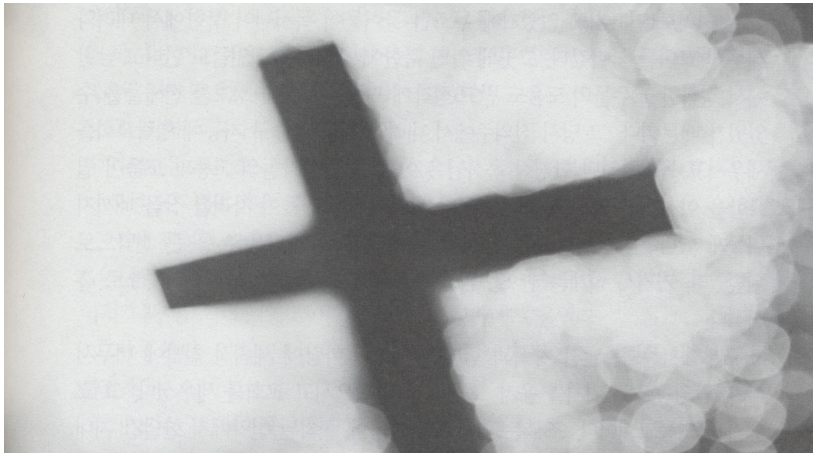
子どもたちに言っている言葉がある。何よりも伝染性が強い二つの選択がある。一つは人を殺したりもするが一つは人を救うことができる。君はどちらを選択する？と聞いたら、当然のように人を救う後者を選択する。しかし、私たちは殆どの事に向き合う時、前者を選択することが多い。それは不平と感謝だ。不平は私の魂を死なせ、他人もともに死なせる。逆に感謝は私も生かし他人をも生かす。それだけでなく、喜びと幸せを伝染させる。感謝する時のみならず、それを超越し、感謝することができないときも感謝する、これこそが真の感謝である。この

ことを家族全員は学んできた。子どもが多いため、実際に豊かではなく、いつも不足していることに慣れている。環境や状況が変わったのではなく、もしかするとより大変で困難な状況にいるのかもしれない。それにも感謝できるのは、使徒パウロの告白のように、「わたしは貧に処する道を知っており、富におる道も知っている」（ピリピ 4:12 前半）――すべての秘訣を御言葉の暗唱を通して学ぶようにされる。子どもと一緒にピリピ人への手紙 4 章を暗唱しなかったら、「わたしを強くして下さるかたによって､何事でもすることができる」（ピリピ 4:13）という、真の意味を悟ることができなかったはずた。

ハバククの祈りのように、――「いちじくの木は花咲かず、ぶどうの木は実らず、オリブの木の産はむなしくなり、田畑は食物を生ぜず、おりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救（すくい）の神によって喜ぶ」（ハバクク 3:17 ～ 18）――救いの神様のゆえに、喜び感謝する家庭になるために御言葉を食べる。小さなことにも感謝、日常の感謝、そうでなくても感謝、にもかかわらず感謝、私と子どもたち、私たちの家族の唇から離れないことを望みつつ、今もまだ狭き道を歩んでいるが、心の板に書き記された命の御言葉の力と能力によって、神様に望みを置いている。賛美のある歌詞のように、主の御言葉に恐れおののき、主の御言葉に命をかけ、主の御言葉に運命をかけて従順し、主に従うことを望む。涙をもって種を蒔く者は、喜びの声をもって刈り取るその日を期待し、今日も罪のために固まって硬くなった心の畑を耕作し、そこに生きておられる神の御言葉を植える。私は今日も御言葉のゆえに泣き、御言葉のゆえに笑い、御言葉のゆえに感謝している。†



我が喜び
我が望みとなれる神様



家族の最高の遺産は何か。財産？学歴？職業？伝統？いや、違う。最高の遺産は勿論「良い信仰の伝統」だ。それは誰も盗むことのできない宝物だ。それは試練と逆境の中でむしろ玲瓏と光を放つ。私は祖父から「信仰」と「祈る方法」と「賛美」と「聖書の人物のストーリー」など、すべてのことを学んだ。祖父は私の先生だ。祖父が良く歌っていた聖歌 527 番「我が喜び、我が望み」と聖歌 498 番「うたいつつあゆまん」は今も私が一番歌う賛美となっている。この聖歌の歌詞が、まさに祖父の信仰告白だ。

「わがよろこび､わがのぞみ／わがいのちの主よ／ひるたたえ､よるうたいて／なお足らぬをおもう（1 節）／ならびもなき愛の主みこえぞうれしき／わがのぞみ、わがいのちは／とわに主にあれや（5 節）」

その当時、祖父が私たちによく聞かせてくれた聖書の人物はヨセフだった。神様の人はいつ、どの場所でも神様が責任を取ってくださる。だから、私たちは神様の時を待たなければならない。神様の人は試練の中でも忍耐しなければならない。そうすれば必ず神様が助けてくださるという内容だった。ヨセフは誰なのか。ヤコブとラケルの間に生まれた人だ。兄たちにいじめられ穴に捨てられた人生だ。そしてエジプトに売られすべての苦難と策略を受けた。しかし、最後には総理となり家族たちを赦し救い出した。

なぜ祖父はヨセフの話をそれほど良く聞かせてくれたのか。その答えは大韓民国の悲劇的な歴史と繋がる。祖父と私たち家族は6.25戦争が勃発した後、信仰の自由を求め、南へ下った。四顧無親な南朝鮮で家族がすがることができたのは信仰だった。それはまさしくヨセフがエジプトですべての苦難にぶつかり、神様にすがることと一脈相通じるのだ。当時脱北民たちの大部分が信仰の自由を求め越南し、クリスチャンとなり、南朝鮮に下り、知り合いの親戚も縁故の場所もないため、無条件に牧師が北朝鮮から下ってきて立てた教会を訪ねていった。そこに行けば、北朝鮮から下りてきた人々に会い、南朝鮮で定着していた人たちからの助けも受け、定着に必要な内容と情報を伝え聞くことができたからだ。その当時、シンウィジュからソウル市チュングチョドンという場所にヨンラク教会を立て、牧会をされていたハン・ギョンジク牧師はこのような脱北者たちの助けが必要だと知り、教会の庭に大きなテントを張って脱北民たちが安定した場所を得るまで宿泊できる場所を提供していた。脱北民らが徐々に増え、ヨンラク教会の庭は大きなテントで溢れかえった。そこで少なくとも１ヶ月、多ければ５～６ヶ月留まり、

定着する場所に散っていった。

祖父は１ヶ月家族とともにヨンラク教会の庭に立てたテントで留まった。ナムヨンドンに移住し、そこに教会を立てた。その教会がナムヨンドン教会だ。祖父はヨンラク教会の庭に設置されたテントで１ヶ月過ごし、そしてナムヨンドンに出て定着する教会を立て、グァンジュで米 南長老教会の宣教師の依頼を受け済州島に渡り、教会を立て、プサンでピョンヤンのソムンバク教会時代から良く知っているソウルに上り、再び場所を決めるまで困難な過程を過ごさなければならなかったが、ただ信仰の力ですべての困難を克服し、全家族の信仰の基礎を確固たるものとされた。その結果、北朝鮮から下りてきた家族、そして８親等の家族に至るまで、家族の中でイエスを信じない者は一人もいない。そして、特別出来の悪い人もいなかった。子々孫々まで祝福を受け、皆が幸せな信仰生活を送っている。これはまさに私たち家族に注がれた「ヨセフの祝福」だ。

ヨセフのように

サムソン創業者の故イ・ビョンチョル会長の部屋にはいつも「木鶏」が置いてあったという。彼は木鶏をみつめ人生と事業の教訓を得た。木鶏の教訓は荘子に記録されている。昔中国に紀悄子という人がいた。彼は闘鶏を育てる名人だった。彼は王から最高の闘鶏を育てよという命令を受けた。彼は闘鶏何匹かを選び、10日ほど訓練させた。出来の良い１匹を選定した。この鶏は空威張りして他の鶏を圧倒した。周囲から小さい音が聞こえても攻撃的な姿勢をとった。王が喜んで言った。

「最高の闘鶏を育てた。」

紀悄子は首を横に振った。「まだいけません。さらに訓練をさ

せなければいけません。」

紀悄子は闘鶏を10日さらに訓練させ、王の前に出て行った。

「もう本当の闘鶏となりました。」

闘鶏は庭の真ん中にどっしりと構えていた。微動もしなかった。それはまさに「木鶏」のように見えるだけだった。王が紀悄子に聞いた。

「あれは何だ。10日前の鶏よりも弱く見えるだけだ。あれは木彫りの鶏に過ぎない。」

紀悄子は笑いながら言った。

「木の鶏のように見えます。あの鶏は周囲の鶏が鳴いても微動もしません。相手がどんなに攻撃をしかけても反応しません。結局攻撃した鶏は疲れ果て最終的には戦いになりません。これが最高の戦いの技です。あの鶏は戦いもせずに勝つ方法を知ったのです。」

サムソンのイ・ビョンチョル会長は自身の事務所に木鶏を置き、人生と事業の教訓としていたのだ。私たちクリスチャンも木鶏から教訓を得ることができる。戦わずに勝つことが最高の勝利だ。戦うと皆傷ついてしまう。

聖書のヨセフも「木鶏」と同じ人だ。自分に向かってくるすべての攻撃と策略の矢を「沈黙の力」で勝ち抜いた。牧会をしてみると本当に多くの危機に会う。私も多くの攻撃を受けて悔しさを感じたことも多い。しかし、祖父に学んだヨセフの話を教訓とし、そのような攻撃に反応しない。しかし、神様に祈り助けを求める。そして時が少し過ぎると必ず真偽が明るみに出る。これは聖書から学ぶ人生の知恵だ。祖父からそのように長い間聞いてきたヨセフの話を通して体得した私の信仰観だ。†

よりによってなぜナラティブ（narrative）説教をするのか？

10年前、チェ・キョンジュ選手が優勝して韓国に戻ってきた。その時彼は、YTN TVのインタビューで次のような話をした。「私には父親の資格がありません。」息子と一緒にいる時間が足りなかったというのだ。息子は、父親がいればスーパーマーケットへ行く時もついて来るし、トイレに行く時もついて来るという。その時、「自分は父親としてやるべきことができなかったんだ！父親の資格を満たしていなかったことに気が付いた」と語った。

私も聖徒たちに対して、チェ・キョンジュ選手のような申し訳ない気持ちを抱いている。聖徒たちは毎週、説教から感動を受けたいと望んでいるのに、私は期待されるだけの満足を与え

ることができていない説教者だ。

4代目の敬虔な基督教家庭の7兄妹のうち、末子として生まれた。父親は長老、母親は勧士、兄たちが牧師という家庭である。幼い頃から啓蒙主義のお定まりの説教を聞き続けて育ち、韓国の講壇から叫ぶ説教者たちは啓蒙主義的説教しか語らないのかと疑念を抱いて、その枠から逃れることを願った。このような乾きがあったからこそ、今日の私は新しいパラダイムのナラティブ説教に心酔するようになったのである。

情熱をかき立てたナラティブ説教

私ほど説教を負担に感じている説教者があるだろうか？ どれほど手間をかけ努力をしても、なぜ私の説教には恵みと感動がないのだろうか？ 聖徒たちに申し訳ないばかりである。おそらく、私の説教には飾りと権威意識だけがあり、真実味が足りなかったのであろう。真実味がないから説得力がなく、説得力がないゆえ聖徒たちを変化させる力もなかった。その中であがいている自分が情けなかった。教会に赴任して10年が過ぎても、説教の負担が重くて、安心して眠ることもできない。寝るのを減らしてでも説教に集中しようとする哀れな努力は、10年ばかりか現在も続いている。今でも、説教のストレスは増すばかりだ。「説教の準備で眠れない夜が続くと、体を壊すのではないか？」と自分でも心配するくらいであった。

私は、自身の説教を冷静に批判してみた。

第一に、私は準備なしに赴任した。

第二に、毎日の説教が負担になった。

第三に、かけた情熱に比して会衆に感動を与えられず、情熱は徒労に終わった。

第四に、人真似をした。（アリストテレスによれば人生とは真似だという）

第五に、祈りをせず、聖書を解釈する能力がなかった。

第六に、霊感を無理やりに絞りだそうとした。（無理やりアーメンを強要した）

第七に、ソウルで活躍したのち地方に来て、会衆との間の教育的、地域的な隔たりを埋めることができなかった。

このように冷徹に分析した結果、私は自分が大声で語る説教に大きく失望した。中身が空っぽの説教に、牧師として神様の前で申し訳なく、自尊心も傷ついた。

こんな悩みを抱えながら、赴任の2年後、インターネット説教アカデミーを訪れた。長老神学校のジョン・ジャンボク教授、キム・ウンヨン教授が運営するアカデミーである。ここで私は、まるでベルボアがアンデス山脈に登って太平洋を初めて発見した時のような喜びを体験した。私は毎日、早天の祈り会の後、インターネットの講義を1時間聞いた。喜びを持って講義を聞き、内容をすべて書き写した。キム・ウンヨン教授からは、新しい説教学方法論を紹介された。ナラティブ説教である。このナラティブ説教が説教方法に対する私の渇きを解決し、私に大きな挑戦の機会を与えてくれた。

ナラティブ説教により私は深い好奇心を持つようになり、まず、講壇の上での情熱が回復された。二つ目に、聖書を新しく読み直す機会となった。三つ目に、説教作成から講壇に立つまでの間、常に聖霊と共に歩めるようになった。四つ目に、聖霊の導きにより、神様との対話の深い海を体験した。そして最後に、聖書を神様の目で読むようになったのである。

神様の目で

それまでは、知識と理性、感性によって聖書を読んでいたが、今はそうではなく、神様の目で読むようになった。本文を深く黙想して祈るようにすると、聖霊の導きにより神様と対話するようになり、神様の側に立って説教を作り、神様の側から語るようになった。このような聖霊の働きにより、私は今日も動かされている。ナラティブ説教をくださった神様に感謝を捧げる。

私が小学校に上がる前、長兄が胃の調子を損ねたため、母親に薬局で〈ひまし油〉を買って来るようにと頼まれたことがある。5ウォンをもらっておつかいに行ったが、薬局で＜ひまし油＞という言葉が出てこなかった。それで「ひ、ひ、ひ、」と繰り返したのちにお金を薬剤師に投げつけて、家に帰ったことがある。それほど私は口下手であった。未だに口下手な人間であり、講壇に立つと足が震える。

そんな私のように至らない人間でも講壇に立たせてくださる神様に、感謝するばかりである。私は今も、講壇で語る説教が聖霊様の感動によって会衆たちに恵みを与えるようにと望んでいる。説教を上手くするのは説教をよく準備することだ。聖書を神様の目で読むとき聖霊様に導かれ新しい説教の語り方ができる。その力を信じ、今日も情熱を傾けて説教を準備している。†

創世記6章4節に書かれた「神の子たち」と「人の娘たち」は誰のことなのか？

「そのころ、またその後にも、地にネピリムがいた。これは神の子たちが人の娘たちのところにはいって、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士であり、有名な人々であった。」（創世記6:4）

まず、ネフィリム（Nephilim）とは、壮大な体で力の強い人を指す。民数記13章31～33節を見ると、イスラエルの斥候たちが見たカナンのアナク人の子孫たちを、そのように呼んだ。このように聖書の難しい箇所は、他の聖書箇所を通して理解すれば、より簡単に解析される。それゆえ、「聖書は聖書によって解析しなさい」という。問題は、その次に出てくる「神の子たちと人の娘たち」の意味がはっきりしていない。

ここで重要なのは、この箇所がアダムの系図の次に出てきて、その次にノアの系図（創世記6:9～10）と、洪水の話（6:13～8:22）が記録されている点だ。筆者がこの文脈の前後を言及するのは、すべての文は文脈、つまり脈略の中でその意味を見出さなければならないからだ。

特に、新約のすべての比喩研究は、生活の状況（Sitz im Leben）の中で意味を見出すのが、一つの定石になっている。こ

の簡単な原理は、19 世紀と 20 世紀に比喩研究の革命をもたらしたきっかけとなった。「生活の状況」とは、簡単に言えば、「文脈を通して」つまり、その箇所を言及した「背景の中で」意味を見出すということだ。この簡単な原理は、旧約であれ新約であれ、すべての聖書に適用される。

もう一度創世記に戻り、創世記 6 章の文案の核心は、洪水審判の理由を提示することに目的がある。人口の増加とともに、不道徳なことも蔓延るようになったということだ。要するに、神の子たちと人の娘たちの結婚が、道徳的に堕落を煽るかたちになったということだ。ある人は、神の子たちは堕落した天使だという。しかしそれは、マタイによる福音書 22 章 30 節の御言葉に、天使は結婚しないという箇所――「彼らは天にいる御使のようなものである」――に背馳されるので、誤った解析だ。さらに、天使たちのために人間が審判を受けることはあり得ない。人間の審判は、人間の罪ゆえに入って来、また来るはずだからである。

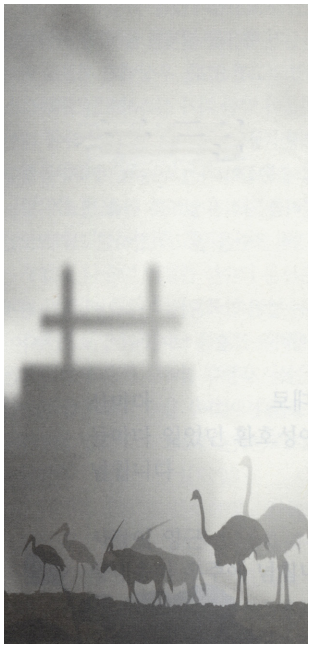
結論的に筆者は、この箇所を救済史的に解釈する。要するに、セムの子孫がカインの子孫と通婚し、一夫多妻制が生まれ、堕落が極限に達したことを語られたものだと解釈する。したがって、神の子たちとはセムの子孫であり、人の娘たちとはカインの子孫を示すものだと見なしている。†

ソン・ヒョンギョン 牧師　アメリカ・ニュージャージ・ゴスペル・フェローシップ教会

ノアの時から
人の子が来られるまで
救いは同じだ

「また義人でさえ、かろうじて救われるのだとすれば、不信なる者や罪人は、どうなるであろうか。」（Ⅰペテロ 4:18）――義人さえもかろうじて救われるのだ。「かろうじて」というギリシャ語は、「難しく（scarcely）」という意味だ。救いの道は狭く細いゆえ、見出す人が少ないと主は言われる。（マタイ 7:14）

弟子たちは主に尋ねた。「ならば、誰が救われることができるでしょうか」と。その時、「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない。」（マタイ 19:26）と、主は答えて言われた。



ところが最近、救いの道に対するメッセージを聴くと、「こんなにも天国に入る道が簡単だろうか。ならば救われない人はいないのではないか」と質問したくなる。神ではなく、人の思い通りに伝える救いのメッセージは、偽りだ。救いは、非常に難しく険しい道だ。見出す人が少なく、灯りを灯す油が足りなければ、救いの門はノアの箱舟の如く閉ざされてしまうのである。

救いは、人が真剣に受け入れたからといってなすものではない。まず、人間にできるものではないということを悟ることだ。救いは、人が切に努力すれば得られるものではない。いかに努力しても得られないということを悟ることだ。箱舟の外にいたノアの兄弟のようにノアが伝える福音を聞き入れなければ、誰も自らは望まないはずだ。これが、宗教改革者たちが回復させられた悔い改めの真理、「全的堕落(Tatal Depravity)」だ。悔い改めない人間は、愛の父も捨てるほど、全的に堕落している。愛を受ければ立ち帰るのではなく、愛を受けている間にも、神を捨てる者たちだ。――放蕩息子の如く。そしてノアの兄弟たちのように。

ノアの時のように、人の子が現れる時も同じだ（マタイ24:37)。当時、箱舟で救われた者はわずか8人だった（Ⅰペテロ3:20)。メトセラの子レメクは182歳にノアを生んだ。595年間子どもを生み続けたので、ノアの兄弟だけでも多いはずだ（創世記5:30)。なのに、その当時、神と共に歩んだ義人はノアしかいなかった（創世記6:9)。だから、箱舟作りに携わったノアの直系家族8人だけが、箱舟に入ることができた。その時代に生きていなかったことが幸いだ、恐ろしい。

ノアの父レメクが56歳の時、アダムは死んだ。アダムが死んで57年後にエノクは昇天した。その時、ノアの父レメクは13歳だった。それから69年後にレメクがノアを生んだ。ノアは、人間の祖先アダムの死を知る父レメクから、アダムが追い出されたエデンの園の話やノアの曾おじいさんエノクの昇天の話まで、直接聞いているはずだ。このすべての出来事が、ノア時代には歴史ではなく実際のニュースであった。ノアの父レメクは洪水が起こる5年前に死んだ。ノアの祖父メトセラは洪水があったその年に死んだ。

ヤシャルの書と悲しき弓の歌

ヨシュアがアモリ部族と戦う時、太陽が中天にとどまっていたという記録や、サウルとヨナタンが死んだ時、ダビデが哀悼するために作った悲しき弓の歌が記録されているヤシャルの書が、旧約聖書に引用されている（ヨシュア10:13、Ⅱサムエル1:18)。現代の聖書批評学の推論通り、聖書を記録する際にヤシャル諸とヨシュアの戦争期（民数記21:14）が参考となったかはわからないが、聖書の中にこういう書物が言及されているのである。しかし、神の言（ことば）である聖書には排除されている。

ところが、そのヤシャルの書を見ると、ノアの父レメクの信仰はそれほどではなかったようだ。いかにしてアダムと同世代を生きたか、天に昇天したエノクの孫レメクの信仰がないということは驚きだ、恐ろしい。ヤシャルの書によると、神は祖父メトセラとノアに、120年間悔い改めの機会を叫ぶようにされた。そのふたりは神の御怒りによる裁きを叫びながら、人々に義の御言葉を宣べ伝えたが、誰も聞き入れなかった。――ノアの実の兄弟たちさえも。

創世期には記録がないが、ヤシャルの書によるとノアが箱舟を作る期間は5年となっている。ですから、義の御言葉を共に伝播していた祖父メトセラは、箱舟が作られる過程を見取っていた。しかし、父レメクは洪水が起こる5年前になくなったので、箱舟が作られるのを見てないことになる。不思議なことに、神が記録された正典には、人々が興味を持つような話はむしろ削除されている。ヤシャルの書によると、ノアは昇天したエノクの娘と結婚し、まずヤベテを498歳に生み、502歳にセムを生み、父親から呪われたハムを生んだとある。しかし、その話はない。ノアの母親は、エノクの子、叔父の娘だった。神が地

を裁かれることを知ったノアは、結婚せずにいようとした。ところが、神はノアに妻を得るようにされ、子どもをもうけて後、箱舟を作るよう命じられた。

てっていに自身のために生き、自身が理解できることだけを受け入れる人間は、生き方そのものが自身に仕える偶像崇拝となり、神の御怒りを積むことになる。いかに誠実に働いたとしても、罪の基準は私たちのうちにあるのではない。神のうちにのみある。なぜ神が私たちに向かって怒っておられるのか――良心だけでは悟り得ない。だから、神の人たちを通して聖書に記録するようにされ、予定通りに神の御子イエス・キリストを遣わされたのである。

ノアの時代に、120 年間義の福音を伝播し続けたが、人々は聞き入れなかった。神の御子キリストがこの地に来られた時も同じだった。3 年半の間、奇跡を直接体験し、永遠の命の御言葉も聞き、イエスが神の御子キリストであると告白した弟子たちさえも、主イエスが十字架に架かられた時、彼らは主を捨てた。ローマカトリックが国家を掌握した際も同じだった。教皇庁は聖書にもない免罪符を売り、人々はそれを買い取った。そして、告解聖事（赦しの秘蹟）を心理学的に救いの道として受け入れた。これに抵抗するプロテスタントは非常に少なかった。今も同じだと、既に聖書に預言されている。使徒行伝には、「……主をおそれ聖霊にはげまされて歩み、……」とある（使徒 9:31）。しかし現代教会は、主を恐れる心はなく、聖霊の慰めだけを強調している。神を喜ばせる前に、神を恐れなければならない。これが、主イエスの御教えである真の救いの道だ。義人も「かろうじて」救われるのである。†

発行：純福音東京教会・出版部

【翻　　訳】：諸星健児 執事、林俊秀教育生、間杉綾乃 サモ、李 珍 執事、朴秀珍 執事、山野永理 勧士、趙芝賢 伝道師、澤田義則 執事、金景娥 執事、朴宰完 按手執事、金澤由紀子 勧士
【日本語校正】：諸星健児 執事、松谷恵理 執事、間杉綾乃 執事、金澤由美 姉妹、吉田綾子 執事、笠原幸子 執事、武石みどり 執事、向川 誉 執事、澤田義則 執事
【印刷・製本】：間杉典生 按手執事
【再　編　集】：金澤由紀子 勧士